

対談：古賀絵里 × 元田敬三

はなさんと善さん

事務局：では、4週目の「浅草善哉」の古賀絵里さんと元田敬三さんです。

元田：この作品はどのくらいの期間で撮ったものなんですか？

古賀：この二人に出会って撮るようになって、1年くらいかな。去年の秋くらいで止めていたんですけど、また展覧会に向けて、今撮り足しています。その前に別の作品ですが、モノクロで浅草を1年くらい撮ってました。

元田：応募点数が少なかったから、ちょっと心配してました。まだ時間があるから大丈夫ですね。

古賀：はなさんは、4月で94歳になったんですよ。おじいちゃんは、10歳くらい年下で83才かな。

元田：えっ？ 昔は年下って珍しいでしょ。カッコいいね。

古賀：お子さんはいらっしゃるんですけど、はなさんが44才の時に善さんと一緒にこの店を始めたんです。カフェというか、お酒とかじゃなくて、喫茶店ですね。はなさんは、家を一步も出ないんです。95年の三社祭りの朝に、張り切っちゃって階段で足をくじいて。体調を崩したんです。それでお店を止めちゃった。

元田：それでこのお店だったところに座ってるんだ。隣近所の人は来ないの？

古賀：前の通りを通って、よっ！って声かけたりしてます。隣に居酒屋があるんですけど、そこのおかみさんが、おかずをビニールに入れて持って来てくれたり。

元田：外出したくても出来ないって感じなんですか？

古賀：体力的にもそうだけど、外に出る気力がないみたい。外を見ているだけで十分って感じ。おじいさんが買い物したり、食事作ったり。

事務局：一番始めはどんな出会いだったんですか？

古賀：三社祭りの写真を撮ったあと、鉛のように重いカメラを持って、疲れてふらふら歩いていました。夕方、民家から灯りが見えて、すりガラスの向こうのあの光なんだろうって。すみませんって声かけたら、「ねえちゃん、何やってんの？ 酒でも飲んでって」って（笑）。誰が来てもそんなんです。

元田：なんか呼ばれたのかな。会う運命だったとか。浅草を最初撮ろうと思ったのはどうしてなんですか？ もともと東京ですか？

古賀：出身は福岡で、大学から東京です。西新井に引っ越して、一本で浅草に行けてふらっと降りてみたんです。なんて言うのか、別世界っていうか……。そのままそこにいても誰からも何も言われないというか、肩ひじはらずにそこにいられる。なにも演じなくていいし、何者かである必要もないし。人がすごく解放されている。たぶん、浅草の持つ歴史みたいなものを背負っていて、だから、何者も受け入れてくれるし、去るものは追わず。そこにいてすごく楽な感じがして。街が好きになって、それからです。これはちょっと写真を撮ってみたいなと思って。

元田：浅草を撮っている写真家って結構多いでしょ。写真集とかいろいろあるし。そういうのを見て影響とかは？

古賀：木村伊兵衛さんの戦後の浅草とか見たりしたけど……。

元田：浅草っていうと、あるイメージがもう出来上がっている。もともとそういう先入観ってありました？

古賀：そうなんですよ。それで撮ったから、どこにでもあるような写真になってしまって、面白くなかった。

元田：しょうがないですよね。いろんなところで浅草の写真や映像を見ているから、どうしても追っかけちゃう。その中で、この二人に会ってリアルに自分のものになってくるわけね。これは浅草のどのへんなんですか？

古賀：西浅草って言って、浅草寺からもっと上野の方へ行った所。賑やかな所からちょっと離れた住宅街です。たまに観光客が迷いこんできたり。

元田：雷門の近くじゃなくて、ちょっと静かなところ？ ほんとと下町ですね。浅草って賑やかな所のイメージのものが多くけど、そうでもないんだ。あんまり“浅草”って出さない方がいいのかもしれないですね。

古賀：逆に、この写真を見て浅草とは思われない。浅草じゃなくてもいいようなものだと思うんです。それが表現できていれば、別にタイトルに浅草って入れても構わないって思ってたんです。だから「浅草善哉」ってつけて。浅草であって、浅草じゃないような写真だから面白いになって、タイトルにあえて入れてみたんです。



元田：浅草って言葉は強いよね。漢字にしても。それがいいのかどうか……。

古賀：来た人が、これ浅草じゃなくてもいいじゃないかって思ってくれることに価値があると思うんです。「浅草善哉」って言って、浅草ままの写真だったら、つまらないじゃないですか。逆にこれだからいいのになって。

元田：よく気がついたね（笑）。みんなその逆をやるよね。いかに沖繩らしいところを撮って「沖繩」ってつけて。タイトルもちゃんと考えてるんだね。

まず日本から見よう

元田：もともと写真を始めたきっかけは？

古賀：大学に入ってから写真部に入りました。高校の時も、コンパクトカメラで友達と撮り合ったり。その頃から写真って面白いなって。

元田：じゃあHIROMIX世代？ 少なからず影響されたところとありますか？

古賀：高校3年くらいの時にHIROMIXが出てきましたね。なんか楽しそうだなという感じはあって、意識しないでもなかった。でもより影響されたのは、小林紀晴さんの写真で、『アジア・ジャパニーズ』ですね。

元田：そうか、そっちな！

事務局：もともと日常スナップというより、リアルな、人に向かっていく写真に興味があったんですね？

元田：まさにフォト・ドキュメンタリー。やっぱり、写真で人と会おうっていうか、リアリティがあったんですね。

古賀：そうなんです、めちゃくちゃ興味があったんです。大学受験の頃、教科書の下に隠して読んでいたくらい。旅に出て、写真を撮ることで会おうということに興味があって。

元田：実際に旅に行ったりしたんですか？

古賀：行きましたね。ネパールとか、中国とか、タイと……。何でも見たいっていうのが強かった。

元田：『アジア・ジャパニーズ』を実践したんだ。それを経験して、この作品にきたっていうのは強いですね。それ聞くと、バックグラウンドがあって深いと思う。

古賀：大学時代に夏休みとか春休みが2か月ずつあるから、青春18切符で日本を旅して、降りては撮って。海外へ行って思ったのは、ヨーロッパでもアジアでもただ旅をしていたら、結局何にもならないってこと。自分の国のことを知らないでやっても、結局土台がないと、偏見でものを見てしまう。だからまず日本、自分の生まれた場所、近場でいいから、土台をしっかり見ておきたいと思って、浅草を撮り始めたんです。



元田：それ、応募用紙にちゃんと書けば良かったのにね。ちゃんと選考されたけど、書けばもっと説得力があったね。

古賀：逆に、この作品をボンって出してダメなら、それだけの写真だって終わらせられても良かった。あえて書かなかったっていうか。

元田：うん、ちゃんと受け取ったよ（笑）。いろんなものを外国で見て、日本撮ろうと思って浅草行って、2年前くらいだね。やっぱりこれがいいデビュー作になってますね。

写真で残したい

元田：二人に写真展を見てほしいですか？

古賀：報告したら、そりゃ良かったねって喜んでました。おじいちゃんに来てくれると思います。いつも出来た写真はあげてますけどね。

事務局：94歳だし、貴重な記録ですね。

古賀：記録に残さないと、庶民の生活も忘れ去られるじゃないですか。抽象的な浅草の何年代はこうでとかはあるけど、こういうふうに具体的なもの、背景が見えてくるものは、言葉や写真みたいなもので残していかないと。

元田：僕はそんなことを考えたことないな。逆に悪いことのような気がする。撮ることが悪いことじゃなくて。写真ってそんなにプラスのイメージないんですよ。

古賀：前のモノクロ撮っていた時は、そんな感じだったんですよ。対象に対して悪いっていうか……。

元田：被写体に対しては、声かけて撮っているから悪いと思わない。迷惑もかけていないし、別に悪用するわけじゃない。ただ、写真を撮るという行為自体は、人の役に立つわけでもないし、そんなにいいことではないと思って。自分が撮りたいから撮って、発表したいからして、僕にとっては自分を満足させるもの。写真はただ残っていくこ

との凄まじさ、そっちの方が強いんですね。だから、今の聞いてちょっとびっくりした。

事務局：元田さんの作品は記録したい、残したいと思って撮っている感じがしなくてもいいですね。

元田：写っているものを残したいというのではなく、物理的な写真1枚1枚は残したい。残ってほしいっていうか……。

古賀：モノクロを撮っていた時は、声をかけたりかけなかったり。そうすると、対象にもっと入っていきたくても、やっぱり表面的にしか追えない居心地の悪さがあった。もういいやと思って撮らなくなって。二人に出会ってから、人間関係というのは責任をとらなければいけないと思ったんですよ。だから二人を撮らせてもらうということは、二人に対して責任を持つということで、撮るならちゃんと撮りたいし、言葉でも文章でも残してあげたいと思う。

元田：その思いが強いんだね。やっぱり場所とか、老人であることとか、歴史があるってことが大きいのかな？ なくなっていくものに対して惹かれるのかもね。たとえば、新宿で若い人を撮って残したいってことにはならないのかな。

古賀：新宿で若い人を撮るのも動機が必要だと思う。その人たちを撮りなくなる理由が自分の中にあるからこそ撮ると思うから。今二人を撮りたいってことは、それは残したいっていう思いがあるから。いつかはギャルを撮りなくなるのかもしれないけど……。一つのものに深く入っていきたくて撮ったんです。例えばこの1枚はあまりにもリアリティがある、この表情がたまたま撮れたんですけど、撮った方は嬉しいけど相手は見せたくない表情かもしれないじゃないですか。それは絶対出したいくない。

元田：ああそうか。そういう意味でボツだね。愛情……。だ。二人に対する愛があるんだね。僕との違いはその違いだ（笑）。

古賀：毎回手土産もっていくんだけど、最近わかったのが、デバ地下の惣菜とかよりも、近くのスーパーで豚コマの安いのが、シャケの切ったのとか、3分でできるご飯とか。そっちの方が喜ばれるってこと。始めは自分がどこかっこつけていて、二人を上に見ていた。届かないもののように二人を見ていたけど、最近は同じレベルで、豚コマ安かったから買って来たよって言えるようになった。距離が近くなって。愛情はありますよ。

元田：僕は愛情ないもんな（笑）。

事務局：元田さんが興味あるのは、人物そのものというより、人が行き交う街みたいなものなんじゃないですか？ 新宿っていう場所の、傍観者でいたいっていうか……。

元田：人はどうでもいいところはある。あまり友達になりたくないんですよ（笑）。知れば知るほど嫌なところも出てきたり、逆に好きになっちゃったりして、関係が変わっちゃう。それがすごく嫌なのかもしれません。一期一会のほうが、関係も気にせず写真が撮れる。

事務局：関係を深く撮りたいというより、その場かぎりの出会った事実を撮りたいという感じでしょか。

元田：自分が好きっていう気持ちで撮る写真って、プラスアルファされる気がして。本当の写真って何かわからないけど、本当の写真じゃないんじゃないかって。さっきの表情選びみたいに、選ぶ時も結局それを落としてこっちは選んじやうとか、それが自分で嫌なんですよ。



古賀：いろんな時があるから、私もまた変わってくるのかもしれないですね。

元田：でも撮っている人の中ですごく好きな人っているんです。写真って全部同じだったらつまんないから、１００枚あったら、２、３枚そういう写真が混ざってたりとかすると面白い。だから仕掛けて、なんか一つ冒険してみてもいいかもね。

突き放してみる

元田：僕は写真展やるのが好きなんです。どういう展示にするかを考えるの、大好きなんです。展示のイメージはもう固まっていますか？

古賀：うーん、あまり見せ方はわからないんだけど、一枚一枚しっかり見てほしい。あまりどうだって主張する感じでなく。すっきり並べて、見る方も偏見なく入っていけるようなやり方。

元田：じゃあ、サイズは小さくして数は少なくてもいいかもしれませんがね。思いきり間隔を開ける方法もあるし。写真はインパクトがあるから数は多くなくても。

古賀：そうですね。でも撮り足さないと。５月の１５日、１６日に三社祭りがあるので、また撮りにいきます。……他に撮った方がいいものってありますか？これから派生して、こんなの見たいいってありますか？

元田：そんなことを言ったら面白くなりそうじゃないですか。僕らの想像を裏切ってほしいと思うしね。

古賀：ヒントとして、動機づけになるものがもらえたらと思って……。選考会のコメントで、二人だけじゃなくて周辺の写真もあったほうがいいっていうのがあって、それもいいかなって思ったんです。

事務局：選考会の時に、そんな話も出たんです。でも家の中の凝縮された二人の世界がいいのかもっていう話しもあって。

古賀：私の中で、二人に対する位置というか、像というかが少しずつ出来上がってきた。それで去年の秋くらいで撮るのやめたんです。いくら撮っても同じ写真になっちゃって。ヒントっていうのは、一度まとまったけどこれからまたより深く二人に入っていく動機みたいなものがほしいというか……。

元田：そうか。なんだろうね……。距離って意外と遠いんですよね。物理的な距離ではなくて、この人たちと会話しているふうに見えないし。話しかけるの？

古賀：するする、すごします。

元田：なんか遠い視線で見ている感じがしますよね。それは自分を出さないっていうのがあるのかな。選考員がみんな良いと言っていたのは、撮っているあなたがあまり出ていないところだって。

古賀：良かった。それがやりたかった。というか、そういう姿勢でやりたかった。自分が自分が……ってなると対象がきちんと見られなくなっちゃうんじゃないかと。だから、そこにあるものを素直に見ていきたい。

元田：目線が合っている写真でもいやしくならないですね。それがすごく珍しい。

事務局：どんなふうにしたらそれが出来るんですか？ 自分を出さないって？

元田：普通こうしよう、ああしようって作意的になるじゃないですか。それがあつた時はダメだね。

古賀：もちろん頭で撮っている写真もあるんですけど、そういうのはセクションで落ちていって。夢中になって撮ってた時のが残る。そういう瞬間って覚えていますよね。

元田：これだって瞬間に撮ったのって、大丈夫だね。なんとなく撮っておこうかなっていうのはダメだね。

古賀：うん、説明的になっちゃう。ここをおさえようかっていうのは、

見る方に伝わってくる。

元田：時間がたつとだんだん自分と二人の関係って変わってくるでしょ。親しくなって、心を許して、表情が変わって、警戒心がなくなって。そういう経過がこの写真には全然ないじゃないですか？ そういう、今まで見せてくれなかった顔をしてくれた、みたいなことがあります？

古賀：笑顔の写真は今のも、昔のも同じだけあるんですよ。始めから受け入れてくれて、笑ってくれていた。笑顔のが入っていないのは、私のチョイスなんです。わざとそういうのははずした。

元田：少し入っていた方がいいのかな……。やってみないとわからないけど、ちょっとロマンチズムじゃないけど、ドラマチックな感じがあるから、もっと素な感じの部分もあってもいいかな。

古賀：かっこよくしすぎて？ 笑顔とかある方が、見る方はほっとできますか？

元田：実際並べてみないとわからないね。この緊張感を保って、ギリギリまでいったほうが面白いと思うし。それを入れるか入れないかは、すごく大きいかもね。それで写真の印象が変わってくる。一番いいところは一番の欠点でもあるけど、ちょっとドラマチックなところ。フォトジェニックな所で、フォトジェニックな二人だから、絵になりすぎて。でも、個展は数が増えてくるからまた見え方も変わってくるし。

事務局：展覧会のセクションって大変ですよね。撮るのも大変だけど、選び方で全然違うシリーズが出来上がる。

古賀：撮って、焼いて、選んで、見せるっていうね。

元田：サイズ、展示方法で変わってくるし。フレームがシルバー、黒か白かとか。まずいちばん考えなきゃいけないのは、サイズだと思うけどね。

古賀：あざとい感じにはしたくないですね。

元田：でも古賀さんは、自分で自分自身をチェックできる人みたいですね。

古賀：やっぱり、つっぱなして考えてみないと。自分を楽しませているだけじゃあ……。ね。

事務局：冷静ですね。夢中になってしまつて、自分のことはわからないものですね。

元田：そう、なかなかできない。人に言われて傾いたりするもんだけど、そういうとこないもんね。良い意味で頑固だし（笑）。あと、写真展ってライブだから、写真展にしかできないことってあるでしょ。写真撮っていく作業、プリントしていく作業と絶対違うなにかってありますよね。だから展示することをもっと自分で想像したり、考えたり、いろいろやってみてほしいですね。

古賀：また撮り足したのをとにかくお見せします。ところで応募はどのくらいあったんですか？ 友達から応募者が５人だったんじゃないかって言われたんです。まさかね？

元田：大丈夫。たくさんいて、選考会も結構時間かかりましたよ（笑）。
２００４年４月２６日（リクルートＧ７ビル）

